

平成13年度

第33回 越谷市民文化祭

平成13年11月22日(木)～25日(日)

10:00～19:00

越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ



◇周りの10個の輪は、昭和29年11月3日に合併した十町村である

二町八ヶ村（「越谷町」の誕生）をあらわす。

十町村とは、越谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・
萩島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの「コ」を4個集めたもの。

つまり、越谷の『越』（「コ4」）を意味する。

◇中心部のデザインは越谷の「谷」の文字を図案化したものである。

◇昭和30年11月3日には、草加町に合併していた伊原、菱塚、上谷
が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和33年11月3日に市に昇格し、越谷市となる。

第33回 市民文化祭の 越谷市郷土研究会展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
1	旧大沢町・越ヶ谷町の石仏	1 ～ 11	加藤 幸一	春日部市大枝
2	越谷の「とうかんや」	12 ～ 13	金岡由紀子	大房
3	前波神社のクンチ太鼓	14	鈴木 進志	大吉
4	国防献金感謝状と動員兵士の写真	16 ～ 17	高橋 清	新川町一丁目
5	蒲生一丁目の神明社	18 ～ 19	高橋 正澄	蒲生西町
6	大沢の地藏橋地藏尊	20 ～ 21	中山 公三	大沢二丁目
7	天嶽寺の稚児行列	22 ～ 23	平井 五六	神明町二丁目
8	増林の茶の栽培	24 ～ 25	山本 泰秀	増林二丁目

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、

越谷市郷土研究会の谷岡隆夫（当会会長・☎962-7527）までお願いします。

1 旧大沢町・越ヶ谷町の石仏

加藤 幸一

今年には旧大沢町・越ヶ谷町の江戸期の石仏・石塔について調査した。調査の詳細な記録については大沢町の光明院、照光院、弘福院や越ヶ谷町の天嶽寺に資料を置かせていただくのでご請求(無料)願いたい。

なお、平成五年から開始した元荒川北岸の左記の江戸時代の村々の石仏の調査記録については、西方の大聖寺(大相模のお不動様)内にある資料室(見学無料)に保管してあるので、ひとこと声を掛けてからご覧願いたい。また、越谷市図書館にも保管されている。

平方村、大泊村、上間久里村、下間久里村、大里村、船渡村、大松村、大杉村、川崎村、向畑村、大吉村、弥十郎村、三野宮村、大道村、大竹村、恩間村、袋山村、大林村、大房村、増林村、増森村、中島村、花田村、小林村、大沢町、越ヶ谷町

旧大沢町

(1) 高畑自治会館

図1は、腕が十本もある仏様であるが、腕が千本もあるという千手観音を表す石仏である。図2・3は、腕が六本もある背面金剛と呼ばれる仏様を本尊とする庚申信仰の庚申塔である。必ずといってよいほど一見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿が見られる。

(2) キャンペルタウン公園

図4は、水神様を祀った石塔である。

(3) 鷲後香取神社

図5・6は、庚申塔である。図7は、普門品(観音經)を一万巻奉納した記念に造立された石塔で、上部には観音様の像が刻まれている。

(4) 大沢香取神社

図8・9は、香取神社の参道の敷石を奉納した記念に造立した石塔である。

(5) 光明院

光明院は、一番の西新井大師(足立区西新井)から始まる「武蔵国の新四国八十八箇所」のお大師様の札所巡りのうちのひとつで、二十九番にあたる。

図10は、「塩かけ地蔵」と呼ばれ、願掛けして塩断し、願いがかなえられると頭から塩を掛ける信仰がかつてはかなり盛んであった。長い間に掛けられてきた塩によってお地蔵様が溶けて、現在のようになってしまった。

図11は、越谷地域に生け花を広めた江戸時代の越谷の文化人の墓石である。

(6) 照光院

照光院は、「武蔵国の新四国八十八箇所」の二十八番にあたる。

図14は、光明真言と呼ばれる呪文の梵字が刻まれた石塔である。これを唱えれば一切の罪業が除かれるとされている。図15は、お寺の鐘を奉納した記念に造立した石塔である。図16は、六種類の観音様を刻んだ石仏である。図17も六人の地蔵を刻んだ石仏である。図18・19は、寺

子屋の師匠のために筆子(教え子)だった人たちが造立した墓石である。図20は、江戸時代の越谷の郷土の地誌「大沢猫の爪」「越ヶ谷瓜の蔓」(市文化財)を書いた福井猷貞の墓石である。

(7) 弘福院

弘福院は「武蔵国の新四国八十八箇所」の掛所となっていた寺院である。

図21は、宝篋印塔と呼ばれる石塔で、法華經が多くの人々の協力により五万部程写経されて奉納された記念に造立したものである。図22は、顔が三面、腕が六本もある馬頭観音像である。馬頭観音は頭に馬の頭が載せられているのが普通であるが、この像には馬の頭が載せられていない。図23・24は、庚申塔である。

(8) 地蔵橋の地蔵堂

地蔵橋そばにある地蔵堂では毎月二十三日に地元の人々が集まって今でも念仏を行っている。そして、このあたりの地名を地元ではかつては「地蔵橋」と呼んでいたという。図28の石仏は、この地蔵堂内にある本尊である。かなり摩滅が激しい。図27は、法華經をわが国の六十六箇所すべてに納めようと回り終った記念に造立した石塔。図25は図14と、図26は図22と同じ種類の石塔である。

旧越ヶ谷町

(1) 天嶽寺

天嶽寺は、江戸時代、越ヶ谷町の住民になるには浄土

宗に改宗してこの天嶽寺の檀家にならなければならぬという特権をもった寺院であった。

図1から8は、天嶽寺の入口にある庚申塚の庚申塔である。図10の六十六部回國塔には、次のような道しるべが刻まれている。

「かかしも(川下)二こう半(二郷半)、

川かみ(川上)かすかへ(粕壁)」

「はしハ(橋は)あと(江戸)、

みやハ(宮は)しやうない(庄内)」

図12は、三夜様(勢至菩薩)を本尊とする二十三夜塔である。陰暦の二十三日の夜に地元の女性が集まり、月の出を待つ信仰である。図13は、狼田彦を本尊とする神道系の庚申塔である。図14は、この天嶽寺が円光大師(法然)の開いた浄土宗の霊場であることを知らせる石塔である。図16は、今回の調査で、市内で二番目の古さを誇ることが判明した庚申塔である。これは背面金剛がまだ刻まれていない頃の初期の庚申塔で、主尊が地蔵菩薩である。市内最古は、大成町一丁目の農協裏の路傍にある承応二年の庚申塔(市の文化財)である。図19も地蔵を主尊とした初期の庚申塔である。図17・18・21・22・24は、「南無阿弥陀仏」と刻まれた名号塔である。特に図18は、念仏僧の徳本行者の直筆による独特の書体で刻まれている。徳本行者の花押(サイン)も見られる。また図21は、増上寺の祐天上人の直筆が鏡文字で刻まれている。花押も見られる。市の文化財に指定された石塔図23

の越谷吾山とは、わが国の「方言学の祖」と呼ばれた越谷町の文化人である。俳人としてもすぐれ、滝沢馬琴は晩年の吾山のもとで俳諧を学んでいる。図25は、現在の御殿町にあった江戸幕府所有の越谷御殿の御殿番を勤めた小杉藤左衛門の墓石である。

(2) 越ヶ谷の久伊豆神社

越ヶ谷町の久伊豆神社は、もとは四町野村の迎儀院とのつながりが深く、その境内地は四町野村の地であった。現在、祭礼の時の神輿の渡御は、白装束をまとった四町野の人々によって行われるのはそのためである。

図26・28は、久伊豆神社の参道の敷石を奉納した記念に造立した石塔。図27は、道しるべが刻まれた庚申塔。

「はし(橋)の方江戸、川かみかすかへ」

「みや(宮)の方さしま(猿島)、川しも二がうはん(二郷半)」

(3) 新道の大師堂

大師堂の正式名は円蔵院といい、「武蔵国新四国八十八箇所」の二十四番目にあたる。

図29は阿弥陀を本尊にした初期の貴重な庚申塔である。

(4) 観音横丁の観音堂

図30・35は、庚申塔である。図31・32は、馬頭観音文字塔である。図32の方は、大相模、野田、庄内を示す道しるべが刻まれている。図33は、図18と同じ徳本行者が刻んだ名母塔である。図34は、弁天様の文字塔である。

(5) 本町の神明神社(市神様)

旧大沢町

1. 千手観音菩薩像



2. 文字庚申塔



3. 青面金剛像庚申塔



4. 水神宮文字塔



5. 文字庚申塔



6. 文字庚申塔



もとは大沢橋の南詰めの元荒川べりにあった。かつて越ヶ谷町の日光街道沿いには、二と七の六斎市(二日、七日、十二日、十七日、二十二日、二十七日)が開かれ、周辺の人々で賑わっていたが、その市場の守り神として厚く信仰されていた。

図36は、越ヶ谷の本町一番組が造立した水神塔である。

(6) 瓦曽根溜井に出る手前の吉川道の路傍

図37は、もとはすぐ近くの日光街道と吉川道(大相模道)との交わる角地にあった。当時盛んであった大相模のお不動様に参詣に行く多くの人々の道しるべとなった。

(7) 新町の今はなき薬師堂

今は薬師堂(越ヶ谷一丁目十一番地南東角地)は取り壊され、栃木相互銀行の駐車場となっている。かつては毎年四月八日は薬師様の縁日で、この日は地元の古老が集まった。また、江戸時代は東正院と称し、このあたり一円は山伏の寺院であった。

図38・39・40は、庚申塔である。図41は、六地藏が刻まれた石塔で、正面の地藏は、子供を左手で抱え、右手は錫杖を持ち、足元では子供が地藏にすがっている様子が描かれている。図42は、静岡県西部にある秋葉山の火伏せの神、秋葉様を祭る石塔である。

(8) 箕輪家(越ヶ谷中町八一)邸内

図43は、越谷周辺の野田、宝珠花、大相模、吉川、成田、鳩ヶ谷、川口の地名が刻まれた貴重な道しるべの庚申塔である。

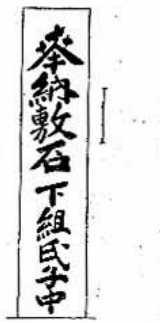
7. 普門品供養塔

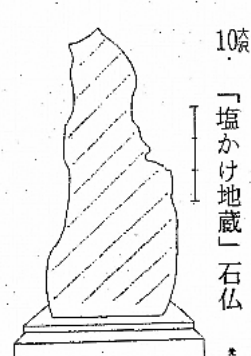
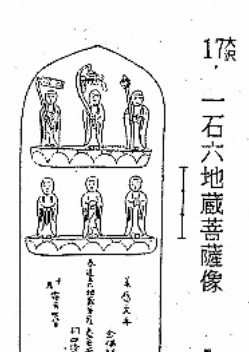
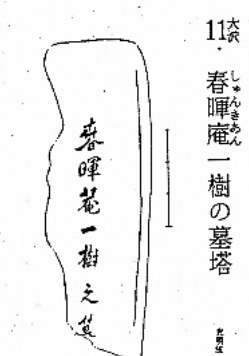
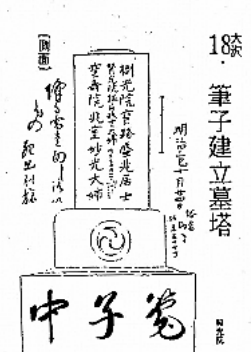
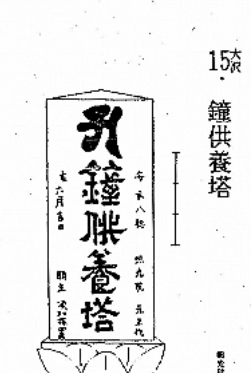


8. 敷石供養塔



9. 敷石供養塔





19番 筆子建立墓塔



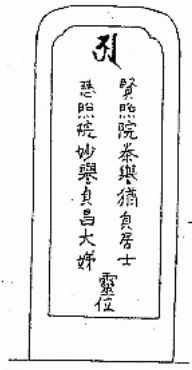
22番 馬頭観音菩薩像



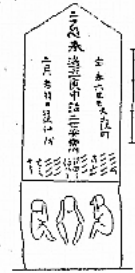
25番 光明真言曼陀羅塔



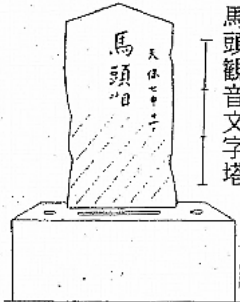
20番 福井酷貞の墓塔



23番 文字庚申塔



26番 馬頭観音文字塔



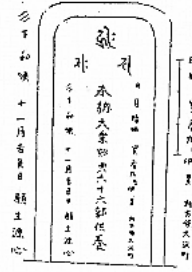
21番 法華経供養塔



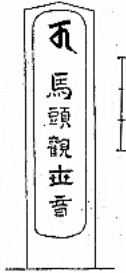
24番 青面金剛像庚申塔



27番 六十六部回国塔



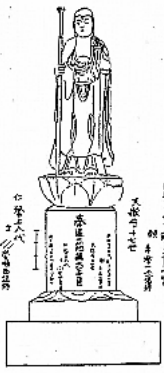
9番 馬頭観音文字塔



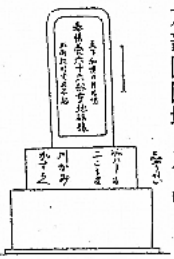
12番 二二三夜塔



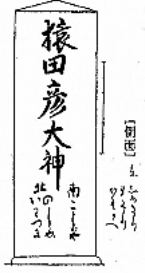
15番 丸彫り地藏菩薩像



10番 道標付き六十六部回国塔



13番 道標付き猿田彦文字庚申塔



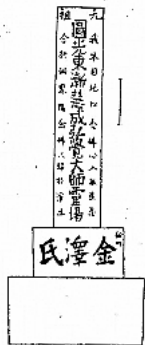
16番 承応三年の地藏像付き庚申塔



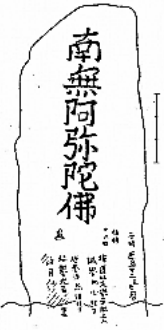
11番 地藏像付き六十六部回国塔



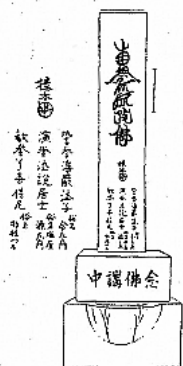
14番 円光大師靈場標識石塔



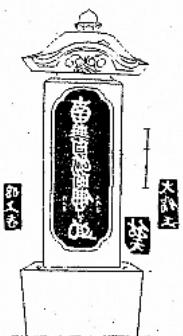
17番 名号塔



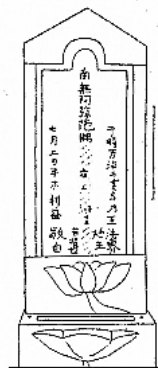
18号 徳本行者の名号塔



21号 名号塔



24号 名号塔



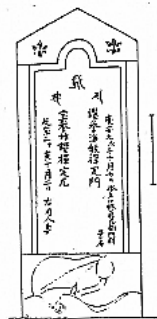
19号 地藏像付き文字庚申塔



22号 名号塔



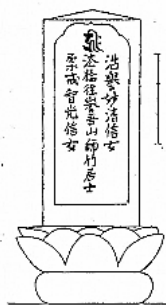
25号 小杉藤左衛門の墓塔



20号 六十六部回国塔



23号 越谷吾山の供養墓石



26号 石橋供養塔



27号 道標付き文字庚申塔



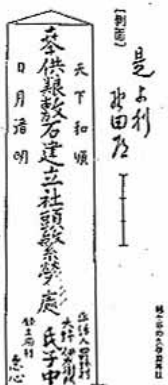
30号 青面金剛像庚申塔



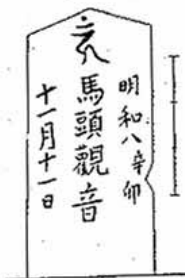
33号 徳本行者の名号塔



28号 道標付き敷石供養塔



31号 馬頭観音文字塔



34号 弁財天文字塔



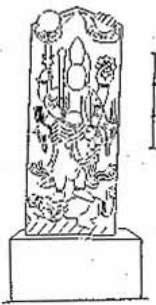
29号 阿弥陀像付き文字庚申塔



32号 道標付き馬頭観音文字塔



35号 青面金剛像庚申塔



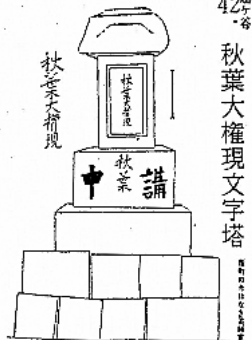
36号 水神文字塔



39号 青面金剛像庚申塔



42号 秋葉大権現文字塔



37号 道標付き不動明王像



40号 青面金剛像庚申塔



43号 道標付き文字塔庚申塔



38号 青面金剛像庚申塔



41号 子安六地藏石幢



「山の神」文字塔



2 越谷の「とうかんやのわらでっぼう」

金岡 由紀子

十一月十日の夜。農家の庭先で「ばん、ばん」という音と、にぎやかな子どもたちの声がします。わらの筒の真ん中に乾いた里芋の茎(すいき)が入っているのので、力いっぱい叩くと、芯が折れて「ばん、ばん」という音になるのです。

秋に穫れた稲のわら。青々とした、いい香りのわらで作られた「わらでっぼう」です。地域によってかけこたばは変わってきます。

【越谷近辺】

蓮とうかんや とうかんや

とうかんやのわらでっぼう蓮

【熊谷市大麻生と江南町】

※実物を作ったK氏ご夫妻の村

蓮とうかんや とうかんや

忍(おし)の鉄砲に負けるな壁

【茨城県下妻市半谷】

幸大麦小麦 三角畑の そばにあたれ産

越谷近辺では、むかしは家々でおこなわれていました。幻の行事になりつつある「とうかんやのわらでっぼう」を今うちちに記録しようと思いました。

「わらでっぼう」を持参して、農家を訪ねたり、畑仕事をしている方から、聞き取りをしました。

来年も、引き続きおこないます。ご協力いただけますと幸いです。

「わらでっぼう」のできるまで

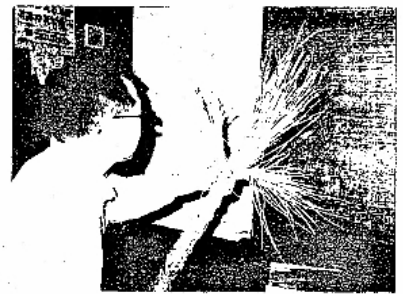
①ずいき(里芋の茎)を入れる



②束ねる



③三つに分け、真ん中は切り除く



④できあがり



3 前波神社のクンチ太鼓

鈴木 進士

増林北部に簡素な神社がある。前波(ぜんなみ)神社、または前波の水神様といわれている。以前は木に囲まれた鎮守の森だった。

終戦までは、五穀豊饒・水難防護のため、毎年十月九日の前夜は、神社にお籠りして深夜まで太鼓を打ち続けるならわしがあった。

お籠りは「クンチ」といわれ、地元の小学五、六年生以上の男の子は、数日前から神社へ布団を持ち込み、毎夕、神社へ通い、泊まり込みで太鼓の練習をした。

青年たちも立ち寄り、子どもたちに太鼓の打ち方を教え、昔の体験を語った。

九日前夜、祭り提灯にかざられた境内に、太鼓を持ち出し、参詣者の前で太鼓を叩いた。時々、大人も加わり、深夜まで打ち続けた。

当夜は、近くの部落でも神社のお籠りがあり、方々の

森から太鼓の音が響いていた。
翌九日朝、人々は赤飯や煮物を供えにくる。子どもたちは大人に倣って、参詣者にお赦いをした。

戦後、お籠りはなくなった。

その後、クンチ太鼓は復活され、はっぴ姿のりりしい和太鼓グループにより、昔のリズムで、各地のイベント会場で演じられている。



4 国防献金の感謝状と動員兵士の写真

— 国民が熱狂して戦争協力したところの証（あかし） —

宮岡 橋 清

昭和十二年（一九三七）七月七日、北京郊外の盧溝橋で日本陸軍と中国の国民党軍とのあいだで戦闘状態になった。はじめは不拡大方針であったわが国は、大規模な派兵を命じた。国民党軍もただちに動員令を発した。以後、八年間にわたる日中戦争が続いた。

「天に代わりて不義を討つ」と村人は神社に集まり、兵士の武運を祈り、青年団のブラスバンドで軍歌を歌って最寄りの駅まで見送った。これを「兵隊送り」といった。国民は国防献金に協力した。新聞にその名がでた。非常に名著と思った。

しかし、戦後の歴史は、不義を犯したのは日本陸軍であったという。感謝状は、小学校高等科二年生の四人が「梨」を仕入れ、小売して得た利益を国防献金として警察に届けた。時の大蔵大臣賀谷興宣よりの感謝状で、当時を思い出さ

せる遺物である。

写真は、動員兵士の出征記念である。一枚の写真・書状でも、五十年以上たてば歴史資料となる。

戦争・事件のすべては歴史となった。



国防献金感謝状



動員兵士出征前の記念写真
昭和十八年十一月（町屋）



動員兵士入営前の記念写真
昭和十三年十二月（農村）

5 蒲生一丁目神明社

高橋 正 澄

今の神明社は、昭和初期に規模を縮小して再建された。拝殿の欄間の唐獅子の彫り物に往時を忍ぶことができる。昔の神明社は、拝殿に回廊をめぐらし、神楽殿まで備えた社（やしろ）であった。

明治二十年の「蒲生村地誌」に、次のように記されている。

所在 字村添
 祭神 天照大神
 社格 平社
 勧請 享保十九年（一七三四）二月
 祭日 十一月三日
 末社 須賀神社（天王社）
 宮司 秋山寿請

小名見田方組ノ内、信徒拾七戸ノ氏神トス。修繕費用ハ右信徒ノ負担、同村・大熊仁兵衛ナル者、天明八戊申（一七八八）四月、拝殿一棟ヲ創建ス。同氏、寛政六甲寅（一七九四）本社ヲ再建ス。今ノ社ヲ言フ。

当社には、文政十三年（一八三〇）造立の石碑「西浦神明宮」がある。西浦（蒲生西町二丁目）にあったが、近年の宅地造成で合祀された。

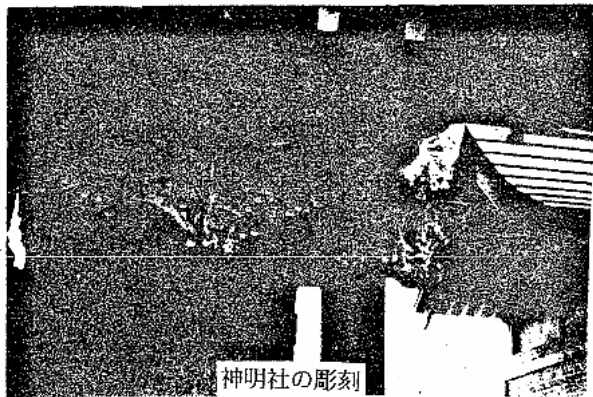
末社天王社（御神楽庫）は、昭和五十八年に再建された。今でも夏祭りがおこなわれている。



神明社（蒲生一丁目）



神明社の本尊



神明社の彫刻

6 大沢の地蔵橋地蔵尊

現在、地蔵橋の東詰南側に石の地蔵尊を安置している地蔵堂がある。もとは逆川（さかさかわ）を隔てた反対側、つまり地蔵橋の西詰にあった。

今でも、この地蔵橋地蔵尊への信仰が続いている。

毎月二十三日（地蔵菩薩の縁日の前日）は、地蔵堂に地元の人々が集まって念仏をおこなっている。

特に八月二十三日は大祭である。

地蔵橋の西詰北側にある屋号が「松葉屋」と呼ばれてきた松沢家は、最近まで「団子屋」の愛称で親しまれてきた。江戸時代は猿島街道（野田街道）に面したこの地で茶店を営んでいたと推定される。

この店に、地蔵橋地蔵尊のいわれが刻まれた年代不詳の縦二九・五センチ、横七七・五センチの板が保管してある。以前は、この店の前に掲げられていたという。

その地蔵橋地蔵尊についての解説文と大意を紹介する。

解説文は本間清利氏によるものである。



中山公三

地藏橋地藏尊の坐する石は、昔に
 火をかして煙草を人にとらるるに似
 て、地蔵ありて橋あるに、地蔵をしら
 め者多し。今、誰いふともなく、古昔
 の由来ありとひとつてには、はしの本の
 老人、所駅の長に問、主しのいはく
 過つる古路ゆかしの末葉、石仏の
 下に宝物を埋め、懐なるかな、諺言
 のくゆるがごとく、雲となく霞とも
 なく消うせたるとうけたまわると語り
 けるに、老人隨測の心にもとつき、歎
 人の喜戯乞て、あらたに美堂を建
 立す。是仏さへも時を得たるとやいは
 む。増して土民の一心たらざりしが
 ゆへに、利益に探あたらず、迷ひ疑ひ
 終にわが業をおろそかにス。既に淺草
 觀世音は、隅田川に沈、綱代守の
 ために、あかり広大に輝、大相模の
 不動尊ハ、六部の友より出て、その
 名ふくをあらわす。大石を穿、尊像と
 なすとも、以是草木の紅葉、扇なく
 成すにひとし、通路の人々、數度に
 及て、合掌せば、地蔵萬代の慈
 眼を開き、痾瘧瘵疾の病を直し、千
 孫長久、繁榮を祈たまわむや

志々
 為子(子)に
 壬寅年(みずのえとらと)の
 十月十六日

地藏橋の地蔵橋は、煙草から
 煙管に火を貸して、中の煙草を
 人にとられるのに似ている。
 それは、地蔵橋があつた地蔵橋
 があるのに(橋の方は人々によ
 く知られていても)地蔵橋のこ
 とを知らない者が多い。
 今は、誰ともなく「古い昔の
 由来がある。」と言つただけである。
 橋のたもとに住む自分は、宿場
 の長老に尋ねてみた。長老が言
 うには、「昔、地蔵にゆかりの
 ある子孫が石仏の下に宝物を埋
 めたことだが、あわれにも
 縁番の煙がけぶるようなもので、
 雲か霞のように消え失せた」と伝
 え聞いている。」
 このことだつた。
 この話を聞いて、自分は幾人
 かの人達に地蔵橋のことを話し、
 寄進を願つて、新たにお堂を建
 せた。
 仏も「やうつ供養してもらへる
 時期が来た。」と喜んでのこと
 と思つた。それと言つても、人々
 の信仰心が足りないうばかりに、
 ご利益(りやく)にあやかれず、
 自ら迷ひ疑ひ、ついには生業さ
 えおろそかにする。
 昔、淺草の觀音様は、隅田川
 に沈んでいたのが、漁師の網に
 かけて世に出ることによつて、
 今では有名なことになつて了。
 又、大相模の不動様は、行脚(あん
 きゃ)僧の友(きりやう)に背負
 われていたものが安置され、靈
 驗(れいげん)あらたかなもの
 となつて了。
 大石を彫つて尊い仏像として
 も(信仰心が足りなければ)そ
 れだけでは草木が紅葉するよう
 な恵みはないのと同じである。
 この通り道の人達は、何べん
 となく合掌しなさい。そうすれ
 ば、いつの時代も地蔵様が慈悲
 の心で私達を見てくださるし、
 病を治し、子孫の末永い繁榮を
 祈つてくださることだらう。

両の手に、良いも悪いもある
 今年こそ両手を合わせて祈らう
 壬寅年(みずのえとらと)の
 十月十六日

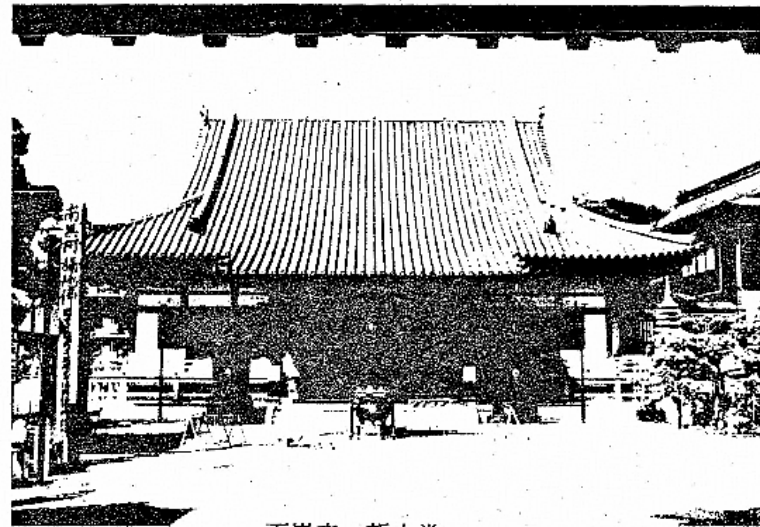
7 天嶽寺の稚児行列

平井 五十六

平成十二年十二月二十六日。天嶽寺本堂の落慶式場の「稚児行列」である。着なれない稚児装束、履きなれない草履にとまどうお稚児さんたちはほほえましい。

稚児は七歳から十二歳ぐらいの子どもを選んで、寺社の祭りの奉仕者とする。

「七歳まで神仏の子」との言い伝えが各地にある。この年齢の子どもは、神仏のもの（社会の外側）でもなければ、大人の社会（制度の内側）でもない中間とされる。稚児は神霊界のものでありながら、同時にこの世にあらわれている天使のような位置にいる。見目うるわしいだけでなく、かるやかで、美しく飾られて、本尊と人との間に立つ役割をになう。



天嶽寺 新本堂



稚児行列

稚児の原型は、子どもが、神霊のとりつく人として選ばれた古い形であった。
浄土宗至登山天嶽寺は、文明二年（一四七〇）、太田道灌の開基と伝える。

昭和四十三年に、本堂・庫裏などの改築をおこなっている。このたび、檀信徒の総力により、本堂新築のはこびとなった。

8 増林の茶の栽培

山本 泰 秀

「増林の茶の栽培の開始」

増林近隣の茶に関する記事を称名寺の金沢文庫の文書によると、室町時代に既に増林の古利根川対岸にある赤岩から称名寺にお茶を納入したことがわかる。

また明治九年の「茶園明細表」(※)によると、増林地区でも江戸時代の幕末には本格的に茶の生産が開始されたと推定できる。県内の狭山茶とはほぼ同時期とみるこ
とができ、注目に値する。

「増林での茶の製法」

昭和初期、増林の勝林寺でも茶を製法していた。生葉(なまは、なまっぱ)の総採集量は、四十貫目位で摘み取った葉は、熱がこもるので床に広げて保管した。ホイロに炭を入れ、火をつけて、その上に稲わら三束の灰をのせ、霧を吹き、やや火力を抑える。一日の生葉の

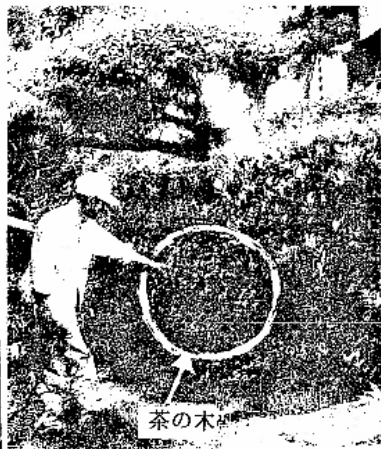
加工はせいせい六〜七貫目だったと言う。

茶蒸しは釜に水をはり、セイロに生葉を入れて蒸す。その間、三回位かき混ぜ、蒸し終えたらムシロにあげ、乾かす。蒸された茶は助炭(じょたん)の中で水分を切る。水分を切るところが重労働である。ホウロク(熟を)受けながら手の平で熱く蒸された葉をねじり、丸め込む作業はかなりの力と忍耐を必要とした。乾燥した茶は、篩(ふるい)にかけ選別されてから壺に入れ保管された。増林での茶の生産は戦後の農地改革と食糧増産体制のもと、茶の木は倒され、昭和二十年後半には製茶は皆無になってしまった。一抹の寂しさを覚える。

※「茶園明細表」は、増林四四〇六の石井正男氏の曾祖父である石井瀬兵衛が作成した「御用日記書留帳」の中にある。

茶園明細表		第壹區 武蔵國埼玉縣 増林村	
反別	播種年月	昨年收穫反計	原産地名
志取	明治三年三月	五百目	下總國中野村 熊
拾	明治三年三月	二百目	下總國中野村 關根平藏
三畝	明治三年三月	〇	駿河國静岡 同 人
拾	明治三年三月	志取貫目	下總國埼玉村 榎秀治
拾	明治三年三月	四百目	下總國山崎村 須賀長吉
拾	明治三年三月	五百目	下總國山崎村 宮川憲三郎
五	明治三年三月	〇	駿河國静岡 石井瀬兵衛
五	明治三年三月	二百目	武蔵國指原 宮川同次郎
計 反別志取及志取葉 人員七人			
右當村内茶園所有者姓名具外書四之通也			
明治三年三月廿日			
増林縣令 白根多助殿			
石井瀬兵衛			

茶園明細表



茶の木



田村家(神明町3-161)の茶の木(「茶の花」と「茶の垣根」)

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

越谷市郷土研究会とは (平成13年11月現在)

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和40年(1965)3月に発足しました。

以後地道に活動し、現在は会員数が約260名程の大所帯となりました。

研究発表会は129回、史跡めぐりは296回を数えるまでになりました。

◎当会の平成9年以降の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成12年1月30日(日) 講師 元埼玉県立さきたま資料館長大村進氏

「創立35周年記念講演会—畑三郎証—」(後援は越谷市教育委員会・文壇)

平成12年9月2日(土) 平成12年度「歴史講座」を開始(全5回)。

平成13年8月26日(日) 奥州街道400年・記念歴史講演会(飯沼楳嶺)

平成13年9月24日(月) 奥州街道400年・記念史跡めぐり(龍崎・龍崎)

平成13年10月8・13日 奥州街道400年・記念史跡めぐり(龍崎・龍崎)

平成13年11月18日(日) 奥州街道400年・記念史跡めぐり(北越谷・北越谷)

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行(B5版、百十～百五十頁程度)

内容は主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

今年6月に会報『古志賀谷』十一号が全会員に無料配布されました。

◎平成13年3月4日(日)の「こしがや文化芸術祭」におきまして、

秘蔵の「増林の円空仏」を一般市民に初公開することができました。

※なお、以上の他に、三宅島噴火・避難村民のためのカンパ活動や越谷市社会福祉協議会への寄付活動などもおこなってきました。

郷土研究会にお入りになりますと

◎すべてのイベントの案内が受け取れます。

せっかくよい行事があったのに知らなかった、ということがありません。

◎会員だけのための特別行事に参加できます。

郷土研究会の会員限定イベント、例えばバス史跡めぐり等にも参加できます。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間2千円(4月～翌年3月、会報・諸案内状・諸会議費等)です。

どなたでも気軽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号を記入し、下記までお寄せ下さい。

または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

☎343-0806 越谷市 宮本町 3-117-8 谷岡隆夫方

越谷市郷土研究会

☎048-962-7527

昨年度の「歴史講座」の紹介

- 第1回 「秩父原人の時代—旧石器時代の謎—」(9月2日[土])
講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 石岡憲雄氏
- 第2回 「三内丸山人の時代—縄文時代の謎—」(10月21日[土])
講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 石岡憲雄氏
- 第3回 「吉野ヶ里人の時代—弥生時代の謎—」(11月11日[土])
講師 越谷市教育委員会 橋本充史氏
- 第4回 「古墳時代を見通す—邪馬台国・ヤマト政権と古墳時代の謎—」(1月21日[日])
講師 埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査部長 高橋一夫氏
- 第5回 「石と水の都・飛鳥」(2月10日[土])
講師 埼玉県立越ヶ谷高校 高崎光司氏

※なお、今年の12月16日(日)に第1回の歴史講座「七福神」があります。

最近の「史跡めぐり」の紹介

- 第283回 11月19日(日)「秋!日蓮の足跡を市川にたどる」(小瀬三郎)
- 第284回 12月3日(日)「蒲生・茶屋通りとその周辺」(高橋正徳)
- 第285回 1月3日(水)「隅田川七福神めぐり」(山田政信)
- 第286回 2月25日(日)会員限定「北条時宗の鎌倉」(宮崎)
- 第287回 3月25日(日)「石仏めぐり《旧増森・中島村》」(加藤一)
- 第288回 4月8日(日)会員限定「会員お花見《本門寺・池上梅園》」(山田政信)
- 第289回 4月29日(日)「ラーメンと古墳と弥生の大遺跡」(宮崎 龍)
- 第290回 5月27日(日)「水川神社の参道から大宮公園」(元、さきたま資料館長の大村進氏)
- 第291回 7月19日(木)会員限定「バスツアー・寄居方面(川の博物館、鯉形城跡など)」
- 第292回 9月23日(日)奥州街道400年・記念史跡巡り「越谷南部」(高橋正徳)
- 第293回 10月8・13日 奥州街道400年・記念史跡巡り「越谷中部」(加藤一)
- 第294回 10月27日(土)「目黒方面、大円寺・蜻蛉師・羅漢寺など」(龍崎)
- 第295回 10月29日(月)「越谷市内・大道遺跡の発掘を見る」
- 第296回 11月18日(日)奥州街道400年・記念史跡巡り「越谷北部」(龍崎)

※なお、12月2日(日)に「奥州街道400年・大沢宿めぐり(龍崎)」があります。

今年の「研究発表会」の紹介

- 第127回 1月30日(日)創立35周年記念講演会
「非運の戦国武将・太田資正」(元、龍崎さきたま資料館長・畑三郎)
- 第128回 6月25日(日)「越谷生まれの江戸町人の活躍」(龍崎)
- ※なお、平成14年1月下旬に「越谷の力士と行司」を予定しています。

※歴史講座・史跡めぐり等の具体的な活動内容については、p15をご覧ください。